

平成30年度第1回総合教育会議議事録

日 時	平成30年8月3日(金) 午後2時から午後3時40分まで	
場 所	ひかりプラザ5階教育資料室	
出席者	構成員	井澤 邦夫 古屋 真宏 富山 謙一 高橋 道子 戸塚 晃 佐久間 博美 塩野目 龍一 村越 隆治 小川 恵一郎 杉本 守啓 木村 達郎 堀田 順也 日高 久善 中島 弘美 松浦 素明 大島 伸二 千葉 昌恵 櫻井 明德 山崎 明子 藤川 浩二 藤原 栄子 鈴木 輝哉 重田 晋作 山田 隆史 大嶽 みなみ
	説明員	市長 教育委員会教育長 教育委員会教育長職務代理者 教育委員会委員 教育委員会委員 教育委員会委員 政策部長 政策経営課長 市民生活部長 文化振興課長 スポーツ振興課長 教育部長 教育総務課長 学務課長 学校指導課長 学校指導課統括指導主事 社会教育課長 ふるさと文化財課長(統括) 公民館課長 図書館課長 第七小学校校長 政策経営課 政策経営課 教育総務課 教育総務課
	学校関係 事務局	
	傍聴人	1人

午後2時00分開会

1 開会

○井澤市長 皆様、こんにちは。市長の井澤でございます。本日は第1回の総合教育会議ということでお集まりいただきました。大変厳しいというよりは危ない暑さでありまして、熱中症の方も例年に比べて3倍、4倍とお聞きしておりますが、このような暑さの中、また、大変お忙しい中、御出席を賜りまして、誠にありがとうございます。

2 協議・調整事項

(1) 東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会に向けた取組について

○井澤市長 次第に沿いまして会議を進行させていただきます。

協議・調整事項でございますが、本日は、東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会（以下「東京 2020 大会」という。）に向けた取組についてということで進めさせていただきたいと思っております。

御存知のように、東京 2020 大会まであと 2 年を切った状況であります。先日、都庁へ行った際、東京 2020 大会へのカウントダウンの日がちが揭示されておりました。既にあと 720 日ということで、いよいよ本当に迫ってきたと感じております。1 年前となると、当自治体の気運醸成も含めて進めていかなければいけないと思っております。

最近、ニュースで競技場の整備などハードの部分について報道がありました。いろいろな整備が進んでいると思っております。また、東京都または内閣府もいろいろ準備を進めている中で、具体的な検討がされてきており、聖火リレーのコース、日程はもちろん、ボランティアの募集も開始されるという取組が始まったところです。自治体においても、それを受けて具体的な検討をしていかなければいけない状況になってきております。

また、既に各学校では、せっかくこのような時期ですので、国際的な感覚を身につけることも含めて、例えば給食でいろいろな国の食事をするなどの取組を行っている状況です。本市としても、自治体としてある国を応援していこうではないかと現在考えております。これはホストタウンという取組です。現在、ベトナム国とその取組をしていきたいということで、いろいろなツールを使ってコンタクトを図っております。

オリンピック・パラリンピックに関わっている部署がいろいろありまして、国におけるオリンピック・パラリンピック事務局がありますし、東京都にもあります。また、オリンピック・パラリンピックの組織委員会との関わりもありますので、協力を得ながら進めていきたいと思っております。

この土台になっているのが、昨年の 6 月 1 日に策定いたしました「国分寺市における東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会に関する取組方針」です。こちらに基づいて、今、着々と進めておりますが、全庁的な取組としてこれからも進めていきたいと思っております。

本日の会議では、いろいろな御意見を出していただければありがたいと思っております。その中でも情報の共有が一番必要であろうと思います。スポーツ振興課を中心として様々な準備を進めておりますので、スポーツ振興課長から、資料に基づいて説明をお願いします。

○木村スポーツ振興課長 資料 2 「国分寺市における東京 2020 大会気運醸成イベント等の取組実績等」をご覧ください。

スポーツ振興課としましては、昨年度より具体的に東京 2020 大会の気運醸成に関わる部分を進めてまいりました。簡単に御紹介させていただきますと、まずはふれあい水泳教室で、アテネオリンピックで 800 メートル自由形で金メダルをとりました柴田亜衣さんを講師に迎えまして、水泳教室等を開催いたしました。また、東京都が主催しております「NO LIMITS CHALLENGE（ノーリミッツチャレンジ）」という、パラリンピックやパラスポーツを普及させていく取組と連動しまして、国分寺まつりと同日に開催しております秋のスポーツイベントに誘致しまして、事業を行っております。また、参画プログラム、オリンピック・パラリンピックのマークを使った関連した事業として、こちらに記載した幾つかの事業を行っております。

今年度に入りまして、こちらの動きを加速させております。

まずは、東京 2020 大会のエンブレムを記載した市封筒の作成です。参考までにお持ちしましたが、このように市の封筒にオリンピック・パラリンピックのマークをつけることで、ホストシティの 1 つとして、市内外に対して国分寺市は東京 2020 大会に関わっていることを PR しております。

また、東京 2020 大会のカウントダウンボードを市民室内プールに設置して、市民の皆さんに周知、広報しているところです。先日、マスコットにミライトワとソメイティと名前もつきましたけれども、マスコットのパネルとあわせて掲示を行っております。

オリンピック・パラリンピアンによる水泳教室では、5月20日はパラリンピックで金メダリストの成田真由美さんを迎えて、講演会、水泳教室等を行いました。また、8月5日、今度の日曜日になりますが、同じくオリンピックで銅メダリストの中村礼子さんを講師に迎えて、水泳教室等を行います。

続きまして、ベトナム国を相手国とするホストタウン登録申請です。内閣官房が進めておりますホストタウン事業がございます。これは地域の活性化、観光振興に資するという観点から、日本国内の自治体等が、特定の国、地域を応援する取組をホストタウンとして進めております。6月末現在で250件の登録があり、日本国内では320の自治体がどこかの国のホストタウンになっております。また、相手国の数は、現在、100か国まで到達している状況になっております。こちらにつきまして、国分寺市として、ベトナム国を相手国としてホストタウンの申請を先日内閣官房に提出しております。現在、審査を受けまして、8月末にはその結果が出るという状況です。

続きまして、「エクストリームスポーツ、障害者スポーツ体験イベント in Bunji Global Festa 2018」です。「Bunji Global Festa」は、青年会議所が主催をしており、今年で3回目のイベントとなっております。東京 2020 大会がありますので、こちらと一緒に事業展開することになっております。具体的には、国分寺市出身でフリースタイルフットボールという競技の世界大会でも2位の実績のある横田陽介さんをお呼びしまして、フリースタイルフットボールの体験会、また、国分寺市と地域活性化包括連携協定を結んでおりますあいおいニッセイ同和損害保険、東京ガスと連携してパラスポーツについての普及活動を行ってまいります。

続きまして、ラジオ体操動画の作成です。東京都が主導する「みんなでラジオ体操プロジェクト」がございます。昨年度から始まりまして、今年2年目になります。東京都からこのプロジェクトをより推進していくために、各市区町村に対して協力要請がございました。これに呼応する形で、国分寺市バージョンのラジオ体操動画の作成を現在進めております。明日、8月4日に、窪東公園で市民の方を募って撮影を行い、おおむね8月中に撮影を終えて、最後は東京都の公式動画サイトに掲載する予定となっております。

続きまして、狛江市との連携によるノルディックウォーキングの実施です。狛江市と連携して、ラグビーワールドカップ 2019、東京 2020 大会の気運を高めていこうと事業を準備しております。具体的には、両市のちょうど中間地点にラグビーワールドカップ 2019 及び東京 2020 大会の会場となる東京スタジアム等がございますので、そちらに向けて両市からノルディックウォーキングで向かいまして、合流したところでイベントを行うことを検討しております。

最後になりますが、現在、バリアフリー化等の改修工事をしている市民スポーツセンターのリニューアルイベントです。工事が終わる来年2月を予定しておりますが、障害者スポーツに焦点を当てたスポーツ体験イベントを開催する予定となっております。

○井澤市長 資料1と資料3についても御説明いただけますか。

○木村スポーツ振興課長 資料1、「国分寺市における東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会に関する取組方針」につきまして説明させていただきます。

こちらにつきましては、大きく5つの柱を設けまして、その柱に基づいて事業を行うことで、期待されるレガシーとして、将来的に残していきたい、つなげていきたい国分寺市のあるべき姿をまとめている取組方針になってございます。

1つ目の柱である大会気運の醸成につきましては、こちらに書いてある取組事例、例えばイベントの開催、また、市立小・中学校における取組等がございまして、これらを市だけではなく、事業者等と連携して行うことによって、地域活動に対する参加意識の向上、市民活動団体や企業等の活性化、また、多世代・地域のつながり強化を目標としております。

2つ目として、スポーツ推進を通じた健康づくり・障害者理解促進です。先ほどお話しさせていただきましたラジオ体操、毎年多くの児童、生徒に参加していただいている史跡駅伝等を通して、児童、生徒から高齢者までが運動・スポーツに親しみ、基礎体力の向上、心のバリアフリーが浸透されただれもが住みやすくていきいきとしたまちをレガシーとして事業を行っております。

3点目としては、まちの魅力発信・地域振興です。この東京 2020 大会を通して、国分寺市を訪れてくださる方を1人でも増やしていきたいといったところでの柱となっております。これらを通して、市民のまちに対する愛着や誇りの醸成、国分寺農業の安全・安心な品質の浸透等について、レガシーとして設定をしております。

4点目として国際交流・おもてなしです。先ほどのベトナムホストタウンにつきましては、これをさらに具体化した取組になっておりますが、もう1つ、「Bunji Global Festa」との連携についても、こうした柱に基づいて進めているところです。互いの文化を尊重し、市民と外国人がともに支え合う地域社会の醸成等をレガシーとして設定しております。

5つ目の柱としましては、景観や環境に配慮した安全・安心なまちづくりです。公衆無線LAN環境の整備等を含めて、安全・安心な都市の実現等をレガシーとして設定しております。

続きまして、資料3、国分寺市における東京 2020 大会までのロードマップについて説明させていただきます。

資料の上の3分の2につきましては、国の組織委員会やその他、国・東京都の動向について記させていただきます。国分寺市の取組はおおむね下の3分の1に記載させていただいております。

まず、国・都の取組につきましては、ラグビーワールドカップを含めて 2019 年度からテストイベント、また、2020 年度は当然聖火リレーがございます。大会気運の醸成につきましては、ここで2年前イベントがございましたが、これから 500 日前、1 年前、100 日前ということで、間隔を少し短くしながら実施をしていくと伺っております。また、先ほど紹介しました「NO LIMITS CHALLENGE」を通じて、パラリンピックへの関心をより高めていく取組を行っております。

また、大会マスコットの選考につきましては、小学生の投票を経て決まったマスコットに対して、今年の7月22日に名前が発表されました。

聖火リレーにつきましては、これから都内のルートの作成に入り、来年の夏ごろ、ルートの概要が発表され、それ以降、聖火リレーのランナーについての選考が始まると聞いております。

大会ボランティアにつきましては、まず東京 2020 大会の大会ボランティアということで、国の組織委員会で、実際に大会の運営に当たるボランティア、全体で約8万人と伺っております。また、都市ボランティアは、東京都が別に募集する東京都のおもてなしに関わるボランティア、これは全体で3万人と伺っております。こちらについて、今年の9月から募集が始まると伺っております。

また、先ほど内閣官房が進めているホストタウンの認定事業、そして、東京都が進めております東京 2020 大会に関する補助事業が展開されております。

こういったものと連動する形で、国分寺市は取組方針を設け、ホストタウン事業、気運醸成事業、また、他自治体との連携としましては、狛江市との取組、東京都と連携したラジオ体操の普及も検討しています。また、施設整備につきましては、今年度行っております市民スポーツセンターのバリアフリー化改修工事や、来年度、けやき運動場の人工芝及びバリアフリー化等改修工事を行っていくこととなっております。

○井澤市長 言うまでもなく、オリンピック・パラリンピックは国際的なイベントです。単なるスポーツイベントということではなくて、今も御説明をしまいましたが、このイベントの持つ意味は非常に大きなものがあって、文化や経済にも大きく影響がある事業です。その意味で、日本の文化を国際的にアピールしていく等様々な形で活用していきたいと思っております。

また、この大きなイベントは、子どもたちだけではなくて、大人にとっても、それから高齢者にとっても、そのレガシーが今でも大きく残っております。全世代にわたっての大きな影響を与えるものですので、そのあたりも含めて、本日は御議論いただきたいと思っております。

その上で、次は学校における今の取組についてお話をいただきたいと思っております。

本日は第七小学校の藤原校長先生にお越しいただきました。第七小学校の取組について、御披露いただければありがたいと思っております。

○藤原第七小学校校長 資料を御覧ください。本校は平成 29 年度、30 年度の 2 年間、オリンピック・パラリンピック教育のアワード校として指定していただいております。アワード校と申しますのは、資料左側にあります、障害者理解、ボランティアマインド、スポーツ志向、豊かな国際感覚、日本人としての自覚と誇りの 5 つの資質に当てた取組を組織的、計画的に行って、皆さんにそれを公開し、啓発するという意味がございます。様々な教育課題がある昨今ですので、新しいことを入れていくことは大変にエネルギーが必要になります。そのため、特別なことをするのではなく、ふだん行っている当たり前のことを当たり前にしながら、それを公開し、どのような意味がオリンピック・パラリンピックに関わってあるのかという価値づけをしていこうということで、平成 30 年度はスタートしております。

育成する児童像を御覧ください。3 つ挙げておりますが、メインのキーワードは多様性と共生と考えております。取組の大きな狙いは、子どもたちが多様性を尊重して、ともに生きる共生社会の中で主体的に生きていける子どもたちを育てたいということが願いです。いろいろな人たちがいて、いろいろな考え方があって、それを受け入れながらみんなでいい社会を作っていこうと考えられる子どもたちを第七小学校で育てていけたらということで、今年度はスタートいたしました。

オリンピック・パラリンピックの取組も今年度は第 2 期に入っております。大きなイベントをするというよりは、先ほど御説明いただいたように、レガシーをつくる取組を主にしております。当たり前に行っているという意味で、まず教員は日々の授業を一生懸命行う、授業改善に努め、それがオリンピック・パラリンピック教育のまず第一歩だろうというところから始めております。そして、子どもたちは、毎日学校が楽しい、明日もまた学校に来たいと思えるような学校生活を送れるように、居場所のある学校、それが本校の教育目標でもありますし、オリンピック・パラリンピックの取組の大きな意味でもあると考えています。

では、本校の取組について具体的にお話ししたいと思います。

レガシーとして 1 つ目に考えておりますのが、障害理解教育です。本校には知的、固定の特別支援学級、けやき学級とそれから今年度、特別支援教室として始まりました、こすもす教室があります。けやき学級には 28 人の児童が在籍しております、交流の学習を進めております。学び方や学ぶ場所、学ぶ速さは違っていても、どこで勉強するかでその人の価値は決められないと意味づけ、どこで勉強していても一生懸命努力することには変わらないということ、学校全体の統一の合い言葉として、いろいろなところで、いろいろな速度で、いろいろな方法で学ぶことは素敵だねという指導をしております。これが障害理解教育の第一歩であると考えています。

レガシーの 2 つ目としまして、パラアスリートとの出会いです。今年度はボランティアマインドに力を入れております。いろいろな方と出会って、それを心の糧にしていこうということで、1 学期にお 2 人のパラアスリートにお会いすることができました。まず、(3) に書いてあります夢・未来プロジェクトに来ていただいたゴールボールの信沢用秀さんが「目が見えないけれども五感で感じて毎日暮らしているよ。見えないときは音でみんなに元気をもらっているの、ぜひ元気に挨拶してほしい」と最初におっしゃいまして、挨拶の練習をしました。そこから、やはり挨拶は素敵なんだと子どもたちは心に刻んだと思います。全学年が信沢さんと一緒にボールを投げたり取ったり、目隠しをして取ることがどんなに難しいことかということを経験させていただいております。

それから、もうお一人は(4)に出ておりますけれども、東京学芸大学の学生の西田杏さん、

国体等で泳いでいらっしゃるパラアスリートです。片足と片腕がとても短くお生まれになった方ですけれども、見事な泳ぎをされています。子どもたちは一緒にプールに入って、同じ目線でプールの水際のところで杏さんの泳ぐ姿を見せていただきました。そこから、泳ぐのは腕や足ではなくて、体幹、体で泳いでいるのだということを感じることができました。そして、努力するということの素晴らしさを心に刻んだと思います。けやき学級の子どもが杏さんに、手や足が短いので痛くはないのですかと質問しました。杏さんは「少し短い手や足で生まれたけれど、それに上手につき合っているから、今は痛くありません」と答えてくださって、子どもたちはそれに驚き、お別れの際に、けやき学級の子たちは「どうぞお大事にしてください」とお伝えしました。杏さんは後で、「すごく元気をいただいて、また優勝できそうな気がします」とおっしゃいました。ぜひ本番も応援しますということで、七小はみんな杏さんのファンになったということがございました。

レガシーの3つ目は、本校はコミュニティ・スクールの指定を受けている関係で、地域の方が授業に入ってくださいる地域参画型の授業を毎年作っております。その中の「英語で伝えよう！国際交流会」と「日本の伝統文化体験」の2つを載せております。4年生は伝統文化を学ぶということで、今年は百人一首に特化して勉強する計画を立てております。現在、百人一首の時代の音楽である雅楽を奏でる方、また百人一首大会のクイーンに来ていただけるよう、コンタクトをとっております。そして、百人一首が上手になりましたら、自分だけの文香といいまして、お香をその歌に合わせて調合するという当時の文化に触れてみる計画を立てているところです。

また、5年生は、学んだ文化を外国の方に伝えようということで、国際交流会のお力添えをいただいて、外国の方をお招きし、日本の伝統文化を英語で外国の方に伝えてみる取組を、現在、計画しております。

本校ではサマースクールを行っておりますが、その中でこのような方たちを少しずつお招きしていきたいと考えております。現在は、その勉強を4年生及び5年生が始めているところです。これらの取組を総合的な学習や英語学習に位置づけて、教育課程としてつくり上げていくことが何よりの本校のレガシーであると考えています。

いずれにしても、今後の子どもたちが、興味を持って多様性を受け入れ、ともに生きる共存の社会について考えてくれたらいいなと考えております。

○井澤市長 藤原先生、どうもありがとうございました。第七小学校の素晴らしい取組がわかりました。御紹介が遅れましたけれども、先生からお話がありましたように、平成29年に第七小学校は東京都の教育委員会からアワード校として表彰（指定）されました。このような取組を今後とも続けていっていただきたいと思っています。

それでは、当初に御説明申し上げましたけれども、オリ・パラに係る給食の取組を行っておりますので、学務課長からその説明をしていただきたいと思います。よろしく願います。

○中島学務課長 小学校の給食の取組について御説明をさせていただきます。

小学校では、平成28年度から、学校給食でオリンピック・パラリンピックに関連した世界各地の料理を給食で提供しております。小学校の栄養士がそれぞれの国のレシピを探し、食数の多い学校でも対応できるように、調理工程を工夫して提供しております。

今、御報告いただいた第七小学校の資料の3ページ目の右上をご覧ください。世界の料理を楽しもうということで、給食を通して、世界の様々な国を身近に感じられるよう、各学校で取組をしていただいております。例えば、月に1回、献立を1つの国の料理のみにして、校内放送も活用しながら学校全体でその国のことを学ぶ、クラスごとに行っているバイキング給食で取り入れる等、様々な工夫をしながら提供していただいております。対象国としましては、これまでのオリンピック・パラリンピック開催国である、ギリシャやフランスなど、世界ともだちプロジェクトとして、各学校が応援する国が決まっておりますが、その国のメニューを提供していただいております。ちなみに、今年は第3回オリンピック・パラリンピック開催国であるアメリカや、応援国であるジョージアやザンビア、ユーゴスラビアなどの国の料理を提供する学校があると聞い

ております。見なれないメニューである、初めて食するものであるため驚くお子さんもいるようです。しかし、その国について興味を持って話が弾む姿を私も拝見して、このような取組が進んでいけば良いと考えております。

報告は以上です。

○井澤市長 ただいま市長部局、第七小学校、学務課から、主な取組について御紹介をいただきました。これからは委員の皆様にご意見、御質問をいただきたいと思っております。お子さんから高齢者に至るまで、市民のオリンピック・パラリンピックに対する気運の醸成を図りたいということで、今後とも国分寺市として進めていきたいと思っておりますので、そういう観点から、どのようにしたら充実を図れるかということも含めて、また、新たにこのような取組をしたほうがいいのかという御提案もいただきながら、御意見をいただければと思っております。

資料1の3ページにありますように、取組方針の期待されるレガシーということで、国分寺市の魅力、認知度をアップさせたいと考えております。ぜひこの点も含めていろいろな御意見を賜ればありがたいと思っております。ぜひ皆さんの活発な御意見をお願いいたします。

説明が沢山ございましたので、どこから手をつければいいのかかわからないと思っておりますが、どこからでも結構ですので、いろいろな御意見を賜れば、御質問でも結構でございますのでお願いいたします。

○古屋教育長 御報告をありがとうございました。

2年間、第七小学校では研究を深められているという御報告でした。特に子どもたちに育てていく5つの資質ということを中心に御指導に当たっているというところでございます。

様々な体験活動、あるいは日常的な学習をさらに位置づけるというところで、充実した教育活動が展開されていると思っております。東京2020大会が2年後になってきた中で、またさらに子どもたちにこの資質についてはもう少し取り組んでいきたい、それに当たって、市長部局とも連携しながらできること、また、このような人材も活用したいということがあったらお伺いしたいというのが1つです。もう1つは、子どもたちがこのように学んでいるけれども、そのことが保護者、あるいは地域の方にどのように広まっているのか、そのことが多分市民の気運醸成につながっていくと思うのですが、その手応えみたいなものがございましたら教えていただきたいと思うのですが、いかがでしょうか。

○藤原第七小学校校長 お答えになるかわかりませんが、まず、私は、今年4月に着任しておりますので、昨年度の取組が全部わかっているわけではございません。パラアスリートやアスリートが来る等いろいろな方たちとの出会いは本当に素晴らしいチャンスであり、素晴らしいことだと思います。では、隣のお友達と仲良くつながっていくということになると、自分の気持ちを伝えるという部分については、出会いだけではなかなか上手くいきません。ですから、学校全体として人とつながっていくということ、コミュニケーションの学習は、このオリンピック・パラリンピックの教育にあわせて進めていかないと、人がつながるということはすごく素敵だなと思った感動を感じることはできないので、そこもあわせて学校全体が強めていかなくてはならない部分だと思います。

また、パラアスリートをお呼びするのは、非常に今難しくなっています。東京2020大会が近づけば近づくほど、多分難しくなってくるのだらうと思うので、お呼びするという形ではない方法を今後探していかなくてはならないと思っております。

それから、保護者の方たちは、子どもたちが喜んで報告すれば非常に関心を持ってくださいます。ですから、子どもたちが感動してくれるかどうかやはり勝負ではないかと思っております。子どもが「こういう人に会ったよ」「こんなことがすごかったよ」「こんな勉強したよ」ということを家庭で話せば、それがどんな広報活動よりも、どんなブログやどんな学校だよりよりも、やはり子どもの感動を伝える生の声が一番の保護者への啓発になると思っております。ですから、子どもたちに「こんなことを学んだよね」と1日に学んだことをしっかり振り返ることをこつこつと続けていくことが、やはり大切だと思います。

○古屋教育長 どうもありがとうございました。当たり前のこと、できることを確実にやっていくことが中心になろうかと思えます。お話を伺っていて、やはりいろいろなことを学んでいるけれども、それをどのように実践化していくかということが非常にこれから大切になるのではないかと、その実践を通して、コミュニケーションをさらに深めていく、あるいはもしかしたらボランティア活動もこれからより充実させていき、オリンピック・パラリンピックの子どもボランティアも、もしかしたら実現できるだろうかと感じたところです。

また、保護者と子どもたちが一緒になって学ぶ場も、社会教育という視点から必要になってくる気がいたしました。

どうもありがとうございました。

○井澤市長 今、発信力の話が出ました。本当にそう思います。

○佐久間委員 今のお話に関連してですが、市民の方にどのように伝えて広げていくかということについてです。できれば、学校の素晴らしい取組を市民の方にも見ていただけたらいいのではないのでしょうか。例えば、子どもの活動をしている方はとても興味があるでしょうし、こういうものを見せてもらったら非常に参考になるのではないかなと思います。市民活動団体の活性化にもつながっていくでしょうし、多世代や地域のつながりの強化にも、期待されるレガシーとしてはつながっていくのではないかなと思っております。

できれば、これからも大会気運の醸成の取組事例の4番で、市内公立小・中学校全校におけるオリンピック・パラリンピック教育推進校としての取組の推進ということが入っておりますので、これらの学校の取組をぜひ学校公開などの折に発表するようにして、それを事前に市民の方にもお知らせして、見ていただけることができたらいいのではないかなと思います。

○松浦学校指導課長 御意見ありがとうございます。

学校で活動している内容、オリンピック・パラリンピック教育については、大分早い段階から学校で取り組んできていて、ある程度形ができていくところだと思います。おそらくその点については、市の全体の進み方とは少し異なっていると思います。これまで様々なアスリート、メダリストの方も来ていただいて、保護者会などのときに公開したこともあります。実は、水泳のメダリストの方が来ているときには、非常にお母さま方から人気で、プールサイドで元気に応援してくださった光景もありました。どのぐらいキャパシティがあって、地域の方に来ていただいて、見ていただけるかということもありますので、調整しながらだと思えますけれども、そのような取組を見ていただくこともきっと良い機会になるのではないかなと感じました。

○高橋委員 藤原先生のお話を通して学校で東京2020大会に向けていろいろな取組をなさっていることが非常によく分かりました。その藤原先生のお話の中で、特別なことをするというよりは、日々の教育活動の中で当たり前に行っている活動がこのオリンピック・パラリンピック教育をどのように意味づけていくことができるのかということを丁寧に示して下さっていることを非常に強く思いました。既に実践し積み重ねてきていることから離れて何かを行うことがオリンピック・パラリンピック教育ではなくて、日々の積み重ねの中でそれぞれ培ってきたことはオリンピック・パラリンピックのあるなしにかかわらず、非常に大事な子どもの発達の過程を支えていくものとして行っているということが、例えばアワード校としてオリンピック・パラリンピック教育ということが冠になったことで、よりはっきりと分かるように取り出して下さったことは素晴らしいと思います。

多くのアスリートの方たちが国分寺市の学校に訪ねてくださり、競技を見せてもらった感動はそれで大きなものだと思いますが、東京2020大会が近づくにつれ、アスリートの方たちが来てくださることが難しくなってきたことについてはそうだなと思います。

そのような意味では、平成30年度の第七小学校の取組の中の障害者理解やボランティアマインドで見たように、パラアスリートの方との出会いではなくて、国分寺市の学校に在籍するいろいろな障害を持っている児童生徒が自分の持っている力をどのように運動面に発揮しているのが通常学級の子どもたちによくわかるように運動会などで一緒に競技をしていくことは非常に大

事だと思いました。

パラアスリートとの出会いをわざわざつくるということ以前に、身近に様々な形でハンデを持っている人は多くいるけれども、その中でどのようにそれぞれが自分の力を出して競技をしているのか、それに関しての積み重ねが、より目に見える形へ持っていきっかけにこのパラリンピック教育もあったという気がいたしました。

既に、学校では様々なことに取り組んでいらっしゃるのので、新たに学校の中で行えると良いと思うことはなかなか浮かばないのですが、ぜひ東京 2020 大会を子どもたちに見せてあげたい、絶対に行ってほしいとは思っています。

今思い出すと、私が高校生のときに前回の東京大会があり、行ったことがそのときはあまり位置づけられませんでした。後からじわじわと実感がわいてきました。何らかの形で国分寺市の児童、生徒が参加できるように市として取り組んでいただきたいと思います。開会式等チケットに高額の値段がついているものではなくて、様々な競技が予選を通して順々に行われますが、競技によっては観戦可能なものも多くあるのではないかと感じます。

当時まだサッカーがあまり周りで盛んでなかったときに、私が通っていた高校がどこかの国のサッカーの練習場になっておりました。その人たちの姿を見て、どこの国だったか忘れてしまいましたが、「見た」ということしか残っていないかもしれませんが、やはり見たということは後から考えるととても嬉しいです。このことについては、ぜひ早く考えていただきたいと思います。

○井澤市長 今、東京 2020 大会の本戦の入場券はなかなか手に入れにくいということがあります。これからどのようになっていくのかと思いますが、何らかの形で子どもたちに競技を見せてあげたいという気持ちは私もあります。東京都もいろいろ考えているところがあるようですし、入場券が手に入れないとしても、今おっしゃったように、練習会場で見るとの機会もあれば良いと思っています。

御提案として受けとめさせていただいて、少し考えさせていただきたいと思っております。

○戸塚委員 何点か質問になってしまうのですが、1点目が、細かい質問で申し訳ないのですが、今回の東京 2020 大会の呼び名なのですが、先ほどスポーツ振興課長は「ニーゼロニーゼロ」と言われていたと思いますが、市長は確か「ニーマルニーマル」とおっしゃっていたかと思うのですが、何かオフィシャルな呼び方はあるのでしょうか。

2点目が、今回、ベトナム国を相手国とするホストタウンの登録申請をしたという御説明があったのですが、あまたある参加国の中で、なぜベトナム国のホストタウンの申請をされたのかを教えてください。

最後に、資料1の4枚目、国際交流・おもてなしというところで、当市と姉妹都市になっているオーストラリアのマリオン市との関係を強化するという記載がされているのですが、具体的にはどのような事業あるいは計画がされているのか教えてください。

○木村スポーツ振興課長 まず、呼び名につきましては、「ニーゼロニーゼロ」大会ということで連絡が来ております。

続きまして、ホストタウンにつきましてはなぜベトナム国なのか、理由が3点ございます。1点目は、国分寺市内に実際にベトナムの方が暮らしていらっしゃるのですけれども、人数が最新の情報で103人おります。これが年々増えているという情報もあります。現に国分寺市に暮らしている方がいらっしゃるということです。2点目は、今から4年前くらいからなるのですけれども、JICAの依頼を受けまして、ベトナム国の幹部研修を当市において行っております。このようなことで、ベトナム国とのつながりが生まれてきたということがございます。3点目ですが、国分寺市と地域活性化包括連携協定を結びました市内にございますリオン株式会社との関係です。リオン株式会社がベトナム国と連携を強めており、例えば補聴器の技術、航空機騒音監視装置技術で連携を深めてきたといった背景があります。

このホストタウンを考えていくときに、まずマリオン市のことは真っ先に当然想定をして、

オーストラリアのホストタウンになることを考えて動いておりましたが、このホストタウンとして認定を受けるには3つの要件がございます。1点目が実際に活躍するオーストラリアの選手との交流です。2点目がオーストラリアに関係する方々との交流、3点目が気運醸成ということで、日本のオリンピック、パラリンピアンを呼んだ事業の展開です。1点目の選手との交流が、マリオン市を通じて働きかけを行ったのですけれども、国が大きく、オリンピック・パラリンピック委員会に到達することができず、断念をしたというところです。最後の質問につきましては、今年度、マリオン市と国分寺市が海外姉妹都市を結んでから25周年の節目ということで、市長がマリオン市を訪問する予定になっていると伺っております。

○井澤市長 私から補足の説明をさせていただきますと、今、課長が言ったとおりですが、確かに最初は姉妹都市であるマリオン市のあるオーストラリアということで手続を行ってまいりました。しかし、先ほどお話があったように、選手団の規模が大きく、当市において事前キャンプも考えていたので、実際にどの競技を受け入れるかということに当たっても、受け入れるキャパシティがありません。併せて、1自治体との姉妹都市ですから、そこから国に要望を上げていくに当たって、オーストラリアのホストタウンには多くの自治体が手を挙げているので、実現性が低いということもありました。この2つの理由で、時間的な制限もある中で、ベトナム国は過去の例をみますとオリンピック・パラリンピックを含めても三十数人という選手団規模ですので、受け入れるに当たっても当市の規模で行えるのではないかと、そんなことも働いて、実際には、先ほど当市との関係や民間での交流も含めて、最近ではベトナム国とのお付き合いが深まっている中で、ベトナム国を選ばせていただいたということでもあります。

○戸塚委員 そうしますと、マリオン市との交流をさらに深める具体的な方策はまだできていないということでしょうか。先ほどの御説明ですと、市長がマリオン市に行かれるというお話はあったのですけれども、それ以外には特に具体的な交流事業は、まだできていないということなのでしょうか。

○井澤市長 マリオン市とは姉妹都市交流ということで、今後とも交流を進めてまいります。今回、25周年ということで、私も訪問する予定でありますし、この交流は深めていきたいと思っています。ただ、今回の東京2020大会に向けては、国との関係になりますので、ちょっとそのあたりが非常に難しかったということでもあります。

先ほど説明いたしましたように狛江市との連携で、選手の方も含めてオーストラリアとの交流を図れるということで、可能ではないかと思っております。

○高橋委員 マリオン市は、今回の東京2020大会のこととは別に、長年国分寺市が交流を深めている姉妹都市ですけれども、それについて、少し私からも付け加えさせていただきます。現在、私は教育委員として国分寺市国際協会の役員になっていますが、市が、例えば今度市長がマリオン市に行くというような公式な交流事業とは別に、これまでも、前市長の時だったかもしれませんが、かなり長い期間にわたって、市が姉妹都市になっていることの中で、マリオン市からも様々な方がこちらに来られまして、そのときには国際協会でも歓迎会や交流会を開いています。それから、昨年、どちらかの学校がマリオン市から来た方を受け入れて、体験学習や、バンドを行ったことがあったと思います。公的なレベル以外に、いろいろな場の中で国際交流があり、以前からつながっているものとしてマリオン市があると思っております。

○井澤市長 今、お話があったように、交流は民間レベルや学校で進めています。東京経済大学も行っていますよね。それから中学校でも行っていますね。

○松浦学校指導課長 マリオン市との交流は、これまでも例えば第一中学校で絵手紙の交換を部活動の一環として行っておりました。

第二中学校は、パソコンを使って子どもたちが、本当はスカイプなどを使って映像でやりとりをしたいのですが、それぞれのパソコンも違うので、メール等を使いながらの交流を行っています。その関係もありまして、先日、マリオン市のバンドに体育館に来ていただいて、生徒たちも一緒になって踊る演奏会がありました。良い交流ができたと思っております。

また、第二小学校にマリオン市に住んでいたお子さんが来て授業の中に入って交流を行いました。第一中学校では、英語の授業をマリオン市の役所の方、市長か副市長だと思えますけれども、いらっしゃって授業参観していただきました。いろいろな形で交流は行われております。

○戸塚委員 私が伺いたかったのは、マリオン市と当市が姉妹都市関係になってずっと交流を続けてこられたというのは分かっているのですけれども、例えばマリオン市の市長を招待して井澤市長と一緒に試合を観戦される等、東京 2020 大会の機会だからこそ、さらに今までの交流を発展させる何か取組はないのでしょうかということがお聞きしたかったのです。

○井澤市長 今回、こちらからお伺いするので、そのような話もしてみたいと思っています。

実は今年の 11 月に選挙があって、マリオン市の市長も代わられるかもしれないという時期ではあります。その点も踏まえて考えていきたいと思っています。

○富山委員 関連してですが、東京 2020 大会を機会にして、日本といろいろな国の人たちが交流していく気運が高まるとともに、実際の活動が行われ、それが大事な遺産として次に引き継がれていくという面で、東京 2020 大会そのものも期待するのですが、今のマリオン市の件も、ベトナムの件も、子どもや大人の人と人との交流に大変期待をしております。

例えば 103 人のベトナムの方が住んでいらっしゃると、多分企業に勤めている方、留学生、多々いるかと思えます。例えば町会の盆踊りにベトナムの民族衣装であるアオザイが非常に合って、今までの盆踊りに 1 つ花が加わるのではないかと思います。

また多くの欧米の国では、教員を 20 年勤めると 20 日ぐらいお休みがもらえて、それを利用してマリオン市から第二小学校に来られた先生のお話を聞いてみました。外国の方が日本の学校に入って大変びっくりされます。例えば授業研究です。私たちの国では、自分がしっかり勉強して教えればそれで良く、先生同士が議論して子どもをどのように認めるか、どのように教えたらもっと分かるか考えるなど聞いたことも見たこともなく、一体何なのだという感じなのです。日本の先生からしたらどの学校でも当たり前です。だから、特別なことをするのではなく、大人の交流、先生の交流の場に来ていただくことが大切です。

あるいは、現在、世界で日本の運動会は大変脚光を浴びています。あのような意図的、計画的なものはありません。そうすると、運動会に来てもらうだけで「これ何ですか」「これは持って帰りたいですね」というレベルのお話に発展するのではないかと思うと同時に、私たち日本人からすれば「そんなにすごいことですか」と気分が良くなります。

すなわち、大人も子どもも交流ができ、お互いの良さが肌で感じられ、自分をリスペクトすると同時に相手もリスペクトできるようなことが、例えばベトナムの件でもマリオン市の件でも大変期待ができると、戸塚委員と市長のお話を聞いて思いました。

併せてですが、まちの魅力の発信・地域振興が資料 1 の方針の 3 にあります。大人も子どももですが、国分寺市の魅力について聞かれたときに、はっきりと自信を持って言う気持ちと材料を持っていることがとても大事だと思います。

英語を教えている外国の方から「日本人は英会話が下手ではない。伝えようとするものを持っていないだけだ。文法や言葉が間違ってもいい。それを伝えたいというところが、他の国に比べると少し弱いよ。」ということを多くの外国人に伺ってきました。国分寺市の魅力は、例えば都市農業のよく発展した都市だと思えます。少品種多量生産ではなくて、多品種少量生産で、しかも地産地消で買ってもらえるものを計画してつくっています。だから、畑を見ても毎年同じものではないです。近所に畑がありますが、全部違っています。周りの人たちが何を望んでいるかというニーズをしっかりと把握して作付けを計画しています。そして、学校給食にも使用されています。この流れは、やはり国分寺市は素晴らしいと思えます。それから、宇宙開発発祥の地は国分寺市です。これもしっかりと自分の言葉で発信できることが大事だと思います。多言語化で表示をする武蔵国分寺跡をとっても、よく私は思うのですが、世界の中で古くから伝わっている文様で、これだけ世界に流布して大事にされている文様は葡萄唐草模様だと思います。この唐草模様は武蔵国分寺の瓦にたくさん出てきます。キルギスの民族衣装、ウズベキスタン、どれを見

でもみんな葡萄唐草模様です。発祥は古代エジプトです。それがここにしっかりとあり、それを多言語化して、ルーツもしっかりとあらわしていくことが大切だと思います。そして 2020 年に向けて国分寺市の子どもも大人も、自信と誇りを持って相手に伝えていけるようにしていくことが、とても意味のあることではないかと思えます。

今申し上げたことは、学校では藤原先生がおっしゃったように特別なことではなくクラスカリキュラムのようにして、しっかりと国分寺市の良さを子どもたちに分からせて、伝えられる力をつけていくと同時に、公民館活動や広報の中で、少しそこにコメントを入れて、国分寺市の良さを知らせ、誇りを持たせて発信することが大切だと思います。大人も子どもも 2020 年を契機として、その後も続いていけば良いと思います。

○井澤市長 今は非常に多岐にわたってお話いただきました。公民館課長、何か御意見ありますか。

○山崎公民館課長 公民館でも、東京 2020 大会に向けまして、気運醸成の講座、多文化共生の講座など、今年度も含めまして企画を考えているところです。また、先ほどお話が出ましたマリオン市 25 周年の関係につきましても、広く市民の方に御理解をいただけるような講座なども組み立てていきたいと思っています。様々なところで国分寺市民の方にオリンピック・パラリンピックについても楽しんでいただける講座などをこれから考えていきたいと思っています。

○松浦学校指導課長 子どもたちが国分寺市のことを学ぶことはとても大事なことだと思います。小学校 3 年生で、「わたしたちの国分寺」という副読本を私たちも作っておりまして、それを使って学んでおりますが、実際に史跡をしっかりと見て感じてほしいということで、6 年生では全員必ず史跡を見学して、ふるさと文化財課の方にも協力していただいて、いろいろな説明をしていただき、学ぶきっかけになっているところです。

また、先ほど前半のところで、日本人は話すことがやはり上手ではないというところもあります。今年度から東京都教育委員会が開設する「TOKYO GLOBAL GATEWAY」という英語村がこの秋からオープンいたします。そこは外国の方がたくさんいらっしゃって、いろいろな場面設定の中で、直接英語を使ってやりとりをする施設です。これもいち早く、市長及び教育長に御判断いただきまして、入場料等を市が負担して 5 年生全員が行けるようになっております。このことは、外国人の方に会ったときに躊躇しないで話すきっかけになるのではないかと思います。中学校では、修学旅行、もしくは都内見学の浅草でも、必ず外国人の方に 1 人声をかけようという取組をしている学校もありますし、学校の掲示物を見ますと、東京 2020 大会に向けてボランティアをやってみたい、いろいろな外国人の方におもてなしをしたいと書いている子どもたちが増えてきているということを実際に見ております。これが 1 年、2 年と近づくにしたがって、そういう気運が子どもたちの中にも高まっていくことが期待できると思っております。

○井澤市長 市長部局から、まちの魅力、こくベジも含めて少し説明してください。

○小川市民生活部長 国分寺市の農家の特徴をお話いただきまして、まさしくそのとおりで地産地消及びこくベジプロジェクトを進めている最中です。これに関しても東京 2020 大会に向けて、GAP という農業生産のスタンダード、グローバル GAP を初め、何種類か GAP があるのですが、東京都で一定のレベルの農産物を集めるためのスタンダードを決めるという中で、今 J A と一緒に国分寺市も参画できないかと研究、検討しているところでございます。

また、宇宙開発発祥の地ということで国分寺市は PR をしております。御存じのとおり J A X A に関しましては、国分寺市が宇宙開発発祥の地であることはしっかり認識していただいております。J A X A については、先だって小惑星リュウグウに、はやぶさ 2 が到着して、研究の最中ですが、東京 2020 大会が終わった直後ぐらいに戻ってくる予定で、その際に採取したものを持って帰れば、さらに日本の宇宙科学技術が注目を浴びると思います。先のイトカワから持ち帰った話だけではなくて、そのような部分も含めて国分寺市の魅力、さらには日本の宇宙開発技術の魅力を伝える良い機会だと思いますので、PR していく必要があると考えております。

○佐久間委員 国際交流に関連してですが、資料 1 の 4 ページの国際交流・おもてなしの取組

事例1で、世界の国々の文化・食・生活などに触れ、学ぶ機会の提供とあります。先ほどから交流のことが話し合われていますが、文化交流という点についてですけれども、相手の国の文化を学ぶということと同時に、日本の文化を紹介することはとても大切なことになってくると思います。先ほど富山委員から盆踊りのお話が出ましたけれども、日本に来られる外国の方は、日本の文化にとっても興味や関心をお持ちでいらっしゃるのではないかと考えております。

国分寺市においては、文化庁と国分寺市の支援を受けて、国分寺市伝統文化子ども教室が平成15年度から開催されております。生活文化4種目、華道、茶道、書道、和装礼法、そして伝統芸能4種目、お能、日舞、詩吟、剣詩舞の合わせて8種目で構成されていまして、その講師は文化団体連絡協議会に登録しているそれぞれの団体の指導者です。外国との文化交流の場面では、何かと協力いただけることもあるのではないかと考えております。伝統文化も幅広く、この8種目に限らず、本当に様々なものがあると思うのですが、市民参加ということも踏まえまして、もしもそういう文化交流の機会を設けようという企画がありましたら、窓口が文化振興課になると思いますので、担当課を通じて御相談いただけるといいのではないかと考えております。

○小川市民生活部長 ただいまお話ありました伝統文化子ども教室、各地の観光地にも浴衣のレンタルがあり、昔、姉妹都市交流でマリオン市から来た学生たちが浴衣を着て楽しんでいる姿も拝見しております。そちらも含めて、今挙げられた8種目とそれ以外の日本の文化に取り組む文化団体連絡協議会の人たちとの交流が、マリオン市の部分では今後ブラッシュアップしていく必要があると思います。その点に関しては文化振興課や文化団体連絡協議会の会長をはじめ、皆さんと検討していく必要があると考えています。特に、マリオン市については25周年という機になりますので、ぜひとも声かけをさせてもらい進めていく必要があるかと思っています。

○井澤市長 「Bunji Global Festa」を行っていますよね。

○小川市民生活部長 「Bunji Global Festa」は2年前から行っておりまして、今年3回目を迎えます。今年は都立武蔵国分寺公園と都立多摩図書館で開催いたします。こちらは国際協会の協力を得て、主催はこれまでJC国分寺でしたが、今年は国分寺市も共催となり、フェスタとフォーラムとあわせて行っていきます。その中で、先ほど申し上げたようにスポーツの部分もブースを設けさせていただいて、一緒に取り組んでいくという体制で今考えているところでございます。また、国際協会にもお声をかけているところです。

○井澤市長 盆踊りも行っていた気がするのですが、四小で開催した時は雨が降りましたよね。

○小川市民生活部長 そうですね。今年の盆踊りの時は少し雨が降りました。

○井澤市長 着物文化は存分に伝わっていますね。

○小川市民生活部長 9月8日の午前10時から午後6時までですので、ぜひともよろしくお願ひします。

○井澤市長 そういう意味で、文化の発信も非常に必要だと思っています。

○高橋委員 ただいま国際交流という言葉が出ましたので、それとの関連でお話しします。

先ほどベトナム国をホストタウンとして登録する働きかけをしているというお話があり、その中で国分寺市には103人のベトナムの方がいらっしゃるというお話がありました。国籍では一番多い方ですか。現在7月末時点で国分寺市に2,276人の外国人がいますが、その中でベトナムの方が一番多いのですか。

○小川市民生活部長 一番ではないけれども、伸び率は一番かもしれません。

○高橋委員 そうですか。

○小川市民生活部長 統計で出している分には、今までベトナム国がないので、ベトナム国の数字は入っていないのです。つまりそれくらい少ない人数だったのですが、これを機に調べましたら、100人を超えているということがわかりました。一番多いのは中国の方が平成30年1月1日現在だと895人いらっしゃいます。その次、朝鮮・韓国系が396人、中国、朝鮮・韓国が長年多いです。フィリピンが102人、それを超えていますので、その他のところで548人という数字の中に入ってしまったのですが、フィリピンより多いという形になりますから、3位と認識し

ていただいてよろしいかと思ます。

○高橋委員 私も今日の会議に出る前に、国分寺市のホームページで見て、外国人の方は3月末時点と比べると198人増えているのですね。特に3月末から4月末の間のところが多いです。仕事や学校が始まるなど理由があるのでしょうか。でも、ベトナムの方が103人いるというのはすごいですね。

ホストタウンの登録の承認された場合、日本人の方とベトナムの選手やベトナムに関係する人たちとの交流というのをまず考えていらっしゃるかもしれません。国分寺市に住んでいらっしゃるベトナムの人にぜひ多く声をかけていただきたいです。当市に在住していらっしゃるし、その中で既に国分寺市の魅力にいろいろな面で接していると思います。そしてホストタウンとして国分寺市がベトナムを迎えるのだというので、同国人として自分たちもベトナムの選手たちに何かやはり励ましたいなど、いろいろな思いもあると思います。現在在住のベトナムの方たちもたくさん巻き込み、日本の方とホスト側として迎える準備や、いろいろな交流のときに、東京2020大会で来る方と国分寺市の市民というだけではなくて、市に同じく住んでいる日本人とベトナム国籍の方として、どのような働きかけをしていくと上手くいくのかというのがあると思うのですけれども、市としての働きかけをお願いしたいと思います。

私は教育委員として国分寺市国際協会の役員になっていますが、国際協会では、今、会員になっている外国人は79人です。市全体で2,276人いる中で見ていくと、本当にわずかであって、個人会員になっている方たちがいろいろな活動、個人会員ではない方にも多分いろいろなお申し出があるときには支援をしているのだらうとは思うのですけれども、市に住んでいらっしゃるたくさんの方たちに対しては、国分寺市としていろいろ働きかけをしていくと、特にこういうオリンピック・パラリンピックという大きなイベントの中で、より一層の交流ができるのではないかと考えております。市にいらっしゃる方たちをいかに巻き込みながら、市の魅力も具体的に住む中で味わってもらおうかというので、何か声がかかると公民館などでもいろいろな活動をなさっているようなのですが、多分そのような機会がどの程度まで増えているのかというのは、まだまだ発掘できる部分がたくさんあるのではないかという気がしております。

例えば、学校で国際交流という形で外国籍の方をお呼びしていろいろな活動をしていくときにも、国際協会として七小でこのような人を求めているけれどもお声をかけようかというときには、多分会員になっている方に対してでないコンタクトができないと思います。市としてはもっと広くつかんでいらっしゃるの、国際協会が公につかめる方たち以外の方がたくさん潜在的に国分寺市にいらっしゃって、その方たちを単に困ったときに日本人が支援するというのではなくて、持っていらっしゃるいろいろな力を国分寺市の中に住む中で発揮したいと思っていらっしゃる方もたくさんいるし、発揮できるのではないかと常々思うものですから、今回の東京2020大会に向けてのいろいろな国際交流を活発にしていく中で、さらにそれが一層できると良いと思います。

○井澤市長 今、2つお話がありました。1つは、今回の東京2020大会のホストタウンの役割ですね。国分寺市に住んでおられるベトナム国籍の方と交流です。

その後は、国際協会との関係です。国際協会と今後どのように連携していくのか、現在、どのような状況にあるのかについて聞きたいということです。最初にスポーツ振興課長からお願いします。

○木村スポーツ振興課長 ベトナムとの関係につきましては、このホストタウンの申請に当たりまして、日本にありますベトナム大使館に市長と一緒に私が参りまして、そこで大使とは会うことができなかつたのですが、公使と様々な話ことができました。この中で、ホストタウンの認定を受けた場合には、とにかく国分寺市民の皆さんにベトナムのことを知ってもらいたいとお話をし、大使館の御協力を得られませんかというお願いをしております。それについては快く引き受けますとお言葉をいただいておりますので、まずは、東京2020大会に向けては、こういった大使館の力も借りながら、交流を進めていきたいと考えております。

大使館が動くことで、今市内にお住まいのベトナム国籍の方もイベント等に参加しやすいので

はないかと考えております。まずは、そういったことをきっかけにして、お声がけをしていきたいと考えています。

具体的には、ホストタウンになりますと、まずその国を知るということで、食で知るという取組を他自治体でも多くやっていますので、その国の味のことを知っていらっしゃる方にどんどん参加していただきたいと考えております。ただ、東京 2020 大会が終わった後も大使館から来ていただけるのかというと、そこは別の話であるかと捉えております。

この東京 2020 大会はきっかけでありますので、その後、市内にお住まいの方、または東京経済大学とも今お話をしているのですけれども、東京経済大学の留学生と国分寺市民が交流する中で、互いの文化を知るという取組については進めていきたいと考えています。東京経済大学にお伺いしましたら、留学生が市内の学校に行ってお話をしたことも過去にあったと伺っていますので、このような取組も引き続き行っていく必要があると考えております。

○井澤市長 国際協会との件を少しお話し下さい。

○小川市民生活部長 まず、国際協会としては、こちらから連絡をとりまして、ベトナムのコミュニティ等についてわかる範囲では聴取しているところですが、恐らく人数が急激に増えていきますので、これに関しては、先ほど高橋委員からもありましたように、何かしら公的なアプローチもいろいろ考えなければいけないのですが、方法はあると考えています。

まず、一番ストレートで特に個人情報等関係ないところで進められるとすると、広報させていただいて、英語ができる、できないというところも隘路にはなりますけれども、お近くにお住まいの日本人の方にアピールし、何とかコミュニティを探って、東京 2020 大会の前の調整期間、東京 2020 大会の期間、特にベトナムとの流れができればと思います。あわせて、在住外国人の方と国際協会、市とのかかわり方、先ほど言った会員の数もあります。こちらに対しては、やはり国際協会の役員の方とも研究して、広い範囲で市全体も日本と同じように国際化しているわけですので、それに対応できるような仕組みをお互いに考えていく必要があると考えています。

○井澤市長 そろそろ時間が迫ってきておりますが、委員の方でまだここを聞きたいというところがありましたらお願いします。

○高橋委員 先ほどぜひ東京 2020 大会を子どもたちが生で見る、感動を味わわせたいという願いをしましたが、もう1つ、東京 2020 大会の前に聖火リレーがございます。聖火リレーが国分寺市も通るという話は聞いているのですが、もう少し具体的に、そのコースや、聖火リレー者が走るのをみんなで子どもたち含めて応援できるように向けての体制など、どのようになっているのか、お話を伺いたいと思います。

○井澤市長 まだ全てが固まっているわけではないと思うのですよね。

○古屋教育長 その点で、ぜひ子どもたちの代表を走らせたいという思いもありますし、また、そのときには沿道に全ての子どもたちが見守るといふ姿を私はもうイメージをしているので、その実現を図っていただきたいと思うのですが、その可能性も含めてお話し聞いたらと思いますので、お願いします。

○井澤市長 教育長から熱い御発言がありました。スポーツ振興課長、どうぞ。

○木村スポーツ振興課長 今、実際プレスリリースされている内容としましては、聖火リレーは15日間ということで、2020年7月10日金曜日から開会式当日の7月24日金曜日までが東京都に与えられた聖火リレーの日程とされております。

つきまして、東京都で既に都知事を実行委員長とする実行委員会が開かれており、こちらについての情報が来ております。この情報からは、まず、1964年の前回の東京大会のときには、全ての市区町村は通りませんでした。今度東京 2020 大会は全ての市区町村を通るといふ情報です。そして、前回の1964年大会の聖火ランナーの条件は、16歳から20歳の体力のある日本人でした。今回は全ての人々、国籍、障害の有無、性別、年齢のバランスに配慮、幅広い分野から選定と、東京都からは情報ももらっています。

全体的なスケジュールとしましては、これから来年にかけて、各市区町村の聖火リレーの

ルートを選定してまいります。そして来年の夏以降、聖火ランナーについての選定が始まると情報が来ております。現時点では以上です。

○井澤市長 まだ最終的に詰まっていない部分もありまして、現在わかっている情報はそのあたりです。各市町村のところにおいてきた段階で、もう少しルートやランナーの選定についてはお話しできるかなと思っています。

○佐久間委員 熱い思いということで、私も1つ。

まちの魅力の発信・地域振興と聖火リレーを何とか組み合わせられないかということで、取組事例の1番のところ、国分寺の魅力を感じられる散策コースを用いたイベントの開催ということがあります。一番できたらいいなど、私のイメージで思うのは、国分寺市の歴史散策コースを聖火リレーのコースに当てることができたら、紹介もできるし、素晴らしいのではないかと思います。例としては天平衣装を着て聖火を持って、名所を紹介しながらめぐる様子を撮影した動画を世界に発信するということができたら、盛りだくさんというか、一度にいろいろなことがレガシーとして残っていくのではないかと思います。もしも実行するとしても、史跡に火を持ち込むのはいかがなものか、そもそも文化財付近は火気厳禁なのではないか、狭いところに人が集まって走るのは危険ではないか、いろいろな課題が出てくると思って、あの歴史コースをそのまま走るの難しいだろうなと思ってはいます。その一部を組み込むことができたら、それは素晴らしいことだとも思っておりますし、また、その史跡コースを実際に巡ることができないとしても、例えば、本当は巡りたいのだけれども、いろいろな事情で難しいので、国分寺市幻の聖火リレーコースや、聖火到着にちなんでめぐる国分寺市健康・美容・歴史のパワースポットみたいな感じで、お楽しみで参加できるものを企画として考えてみても、それはそれで楽しいのではないかと思います。

○井澤市長 いろいろな御提案がありましたけれども、この東京 2020 大会を契機として、市民の方に大きくかかわっていただいて、国分寺市の魅力、伝統を発信できればいいと思っておりますし、もちろんスポーツの祭典でありますので、市民の健康や国分寺市に対する思いの醸成も図っていかねばいけないと思っていますところであります。

本当に盛りだくさんで、まだまだお話をさせていただきたいところなのですが、そろそろ時間が迫ってまいりました。どうしてもという方がありましたら、お手を挙げていただければと思いますが、よろしいですか。

今日は2年後に控えた東京 2020 大会について委員の方々から貴重な御意見を賜りました。本当にありがとうございます。これから国分寺市にも大きく影響してくる事業でありますし、市としてもできる限り市民の方々に参画していただけるような方向で考えているところであります。教育的な意味も非常に大きいということで、子どもたちも大いに今から参加していただいておりますけれども、2年先、またその後のレガシーにつながるような大会にしていければ良いと思っております。

今日は本当に貴重な御意見ありがとうございました。

3 その他

○井澤市長 これで、今日のお題については終わらせていただきますけれども、事務局から何かありますか。特にありませんか。

それでは、その他ということはないようでございますので、平成 30 年度第1回総合教育会議はこれをもって閉会とさせていただきます。本日は大変御苦勞さまでありました。ありがとうございました。

午後3時40分閉会